

在宅療養児の食の支援を考える ～多職種連携の重要性～



医療法人天翔会（鹿児島市）看護部長
鹿児島こども訪問看護ステーション管理者

渡邊 理恵

学 歴

1982 年 3 月 大分県立上野ヶ丘高等学校卒業
1982 年 4 月 大分県立厚生学院看護学科第 1 科入学（現：大分県立看護科学大学）
1985 年 3 月 大分県立厚生学院看護学科第 1 科卒業
1994 年 3 月 日本女子大学家政学部児童学科卒業（通信教育部）
2005 年 4 月 鹿児島純心女子大学大学院 人間科学研究科入学（臨床心理学専攻）
2007 年 3 月 鹿児島純心女子大学大学院 人間科学研究科修了

職 歴

1985 年 4 月 大分県立病院 看護部入職
（整形外科・血液内科・神経内科・産科・婦人科・消化器外科）
1989 年 3 月 厚生（労働）省看護研修研究センター看護教員養成課程終了
（1 年間大分県より出張）
1997 年 7 月 鹿児島中央訪問看護ステーション入職
” 退職
2010 年 6 月 鹿児島中央訪問看護ステーション 子ども訪問看護室 入職
2013 年 6 月 鹿児島こども訪問看護ステーション（配置換え）
2014 年 10 月 医療法人天翔会看護部長（兼務）

1. 法人の紹介・・3 部門 4 組織 職員 57 名（Dr13 名・Ns32 名・PT4 名・事務 8 名）

五反田内科クリニック診療部・・・在宅総合支援診療所 患者数 約 600

五反田内科クリニック リハビリ部門・・・平成 28 年 6 月訪問看護から移行 約 60

鹿児島中央訪問看護ステーション・・・平成 4 年開設（介護保険施設）患者数約 80 名

鹿児島こども訪問看護ステーション・・・平成 25 年（医療保険施設）患者数約 50 名

2. 鹿児島こども訪問看護ステーションの紹介

平成 13 年／鹿児島中央訪問看護ステーションで小児を受け入れ開始。

当初は摂食訓練や口腔ケアに積極的に取り組んでいなかった。

平成 22 年／こども訪問看護室として小児のみを対象として改めて在宅の小児看護の取組開始。

小児専門の摂食指導を行う歯科医師との出会い。

平成 25 年／鹿児島こども訪問看護ステーション開設。

小児に特化した医療保険事業所として開設した。

その理念は「子育ての共有者として医療の立場から健康をささえる」とし、子どもの心身の成長発達を促すためには、「食」の支援抜きには語れないと考える

3. 事例を振り返る

1 5歳女児／脳性麻痺 発達遅滞 てんかん

2歳から訪問看護利用。食べることが大好きで何とか経口摂取続けていたが閉口不十分であった。

連携1／ 10歳 小児歯科医・訪問看護師・母親

摂食訓練の指導を直接受ける。同時に舌接触補助床の説明を受け、舌のリハビリの重要性を再認識する。在宅で母親と共に積極的に取り組む

連携2／ 12歳 訪問看護師・PT・支援学校の栄養士・担任

食事時のポジショニングをPTに相談 支援学校の栄養士と食事に形態

(とろみの程度など) 細かく調整・担任が訪問看護のリハビリを自宅で見学

連携3／ 16歳 高校の栄養士・担任・在宅小児科医

嚥下機能評価では経口を続けることは難しく胃瘻を勧められた。しかし、なぜ一度も誤嚥性肺炎を起こさず経口摂取出来てきたのか???それは多職種が連携することで、本児の食に関する能力を最高に引き出すことが出来たのではないか。人間の機能は医学に基づくエビデンスだけ語り尽くせない側面を含んでいる。本児が食を楽しめただけではなく、生命維持・生命の質を左右したと言える。母親の子育てを「多職種連携することで支えた」と言えるのではないか。

4. 今後の地域における多職種連携について

<地域は生活の場である>

病気や障害に注目するのではなく、その子の持つ力や家族の持つ力を見極め、専門家でありながら子育ての共有者という身近な立場から関わる必要がある。

医療は器質的問題を見つけて診断し治療をするが、器質的に問題がなかったり、治療の手だてがない場合にも、患者の困りごとを良く聴き、残された機能を最大限に引き出す役割が求められると考える。

<看取りの経験から連携を振り返る>

70代男性 腫瘍による食道狭窄から閉鎖 経口摂取できずストレスが大きかった告知はされておらず、何をどのように頑張れば良いか闘病の方向性を見失っていた。

口腔ケアと齲歯の抜歯を歯科医に依頼した。見捨てられ感の中で抜歯という治療ができたこと、口腔内に積極的に触ってもらったことで精神的に落ち着き、数週間の命と言われて始めた在宅療養だったが約5か月闘病し、家族の見守る中平静な気持ちで最期を迎えた。

<呼吸・ことば・食の支援として重要な役割を共に手をつないで・・・>

連携は同じ支援の方向を向くという難しさを抱える。他の職種の役割を理解し、尊重しながら「心の垣根」を払い協働で「命を支える呼吸」「仲間との関係を支えることば」「人生の楽しみを支える食」を守るために取り組みたいと考える。